



特定ケア看護師への期待

JADECOM-NDC研修センター 鈴木靖子

看護師の特定行為の研修制度が施行され、3年が過ぎました。10年間で10万人の育成が計画されていましたが、試行事業である高度実践看護師（診療看護師）を含めても、やっと1,000人を超えたところですが、まだまだ周知されているとは言えないのが現状です。

今現在は、大学院を修了した『診療看護師』と特定行為研修を修了した『特定行為に係る看護師』が、法的には同じ位置づけとして存在しています。『特定行為に係る看護師』には、いくつかの区分を修了した『区分選択のタイプ』があり、1区分から21区分までと修了している区分はさまざまです。教育機関によって求めるレベルもさまざまで、修了とする教育のレベルにも大きな差があるようです。恐らく今後は『診療看護師』と『特定行為に係る看護師』の2つに区別されていくであろうと予想されます。

地域医療振興協会が目指しているへき地・地域医療には、診療看護師レベルが求められています。しかしただでさえ少ないリソースの中、大学院教育の2年間のブランクは現実的ではありませんし、育成を待っている余裕もありません。そこで立ち上げたのがJADECOM-NDC研修センターです。現在法で許される全ての行為について1年間で履修し、臨床推論の基礎をしっかりと身につけておけば、実践を積み重ねた上で「診療看護師と並ぶ力」となることを目指しています。数年の実績と認定審査のようなもので、肩を並べられるような制度になるのではないかと期待しているところです。

私たちは特定行為ができるという手技の獲得を目標にはしません。その行為が必要かどうか

の判断を含め、考え、表現する力を大切にしています。先行して活動している診療看護師の業務調査でも、特定行為そのものに関わる業務は、全体の約2割だそうです。特定行為の実践者ではなく、先人の診療看護師の働き方を目標としています。

研修、特に実習が始まると、研修生から「医師の言葉が分からない」と言うのをよく耳にしました。医師の世界に入ってみて、私たち看護師と使う言葉が違っていることに改めて気づき、共通言語の重要性、それにより医師への適切な報告、情報提供ができるということも理解できました。医師と共に行動することで、何を情報としてどう考え判断するかという思考過程について学びます。これが臨床推論です。私たち看護師も情報を得てアセスメントから判断を導き出しますが、医師の診断と治療のための臨床推論と違い、自分で対応できるか医師につながるか、急ぐか等の現場での対応を判断し看護に落とし込むための臨床推論であり、これが『診る』と『見る』の違いだと考えています。

修了生が「自分たちの役割の1つは急変の種を1つずつ摘んでいくこと」と言ってくれました。これらの力を発揮し、看護師が気づいた小さな「兆し」をキャッチし、集めた必要なデータと定義と照らし合わせて医師へ報告することで、予期せぬ急変は確実に減らすことができていると信じています。これは患者にとっても大きな貢献ですし、看護師にとっても看護の質を確実に上げていくプロセスです。また修了生は「研修医と違うところは生活背景まで全てをみて捉えること」とも言ってくれました。経験を重ねた看護

師ならではの視点も大切にしています。

今年度、与那国町診療所での活動のチャンスも得ることができました。行ってくれた1期生は、初めての活動ということで失敗する訳にはいかないというプレッシャーを感じ、自分の中に蓄積してきた知と技を総動員させて臨んだと言ってくれました。受け入れてくださった医師からは、「特定ケア看護師の優秀さに驚かされ、一緒に仕事ができ本当に楽しく、頼もしく、非常に有意義な時間であった。大成功だと思っている。」とのコメントをいただきました。

以下は、特定ケア看護師の先人である診療看護師が活動した結果、受け入れ先の看護部長がまとめてくださったもので、まさしくこれが目指すゴールです。

1. 患者の一番近くで看護経験と医学的な知識を結びつけて行う観察や判断は、医師への信頼度や期待度が高まり、多忙な医師の身体的、精神的な負担の軽減に大いにつながった。

2. 患者や家族の話や思いをよく聞き、不安や苦痛を軽減するために妥協せず治療方針を探る姿勢に、高齢者への医療のあり方を教えられた。

3. 患者の観察とカルテ上の情報から、診療上の問題を推測する思考過程が明確でとても勉強になった。診療看護師の記録を見て、看護師の観察の重要性と共有できる記録の必要性を感じた。

4. 整形外科の患者について内科的疾患がある場合、多忙な内科にコンサルトしなくても、診療看護師からの提案でタイムリーな診療ができた。

5. 病棟看護師は些細な疑問も聞きやすく、診療看護師からの答えは明快で勉強になった。

6. 毎週30分の疾患、症状、処置に関する勉強会が、とても好評だった。

7. 現場の看護師と協力して通常の看護実践もして、2年以上人工呼吸器を装着している患者の入浴を実現できた。

8. 薬剤師、臨床検査技師、放射線技師、管理栄養士、リハビリセラピストなどにも積極的に意見を求めていた。多職種に特定ケア看護師を理解してもらえるだけでなく、それぞれが専門職として知識の向上と医療チームの一員としての活性化につながった。

特定ケア看護師として活躍するためには、まずは信頼を獲得しなければなりません。それには、これまでの確かな看護実践と個人の人物力がとても重要です。看護師としての経験を通して育んできた人物力に知と技とマインドを積み重ね、人としても大きく成長してくれることを期待したいと思います。

看護師の新たなキャリアの形に、あなたもチャレンジしてみませんか?!